様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６２７
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2013～2014
課題番号：２５８８５０７２

研究課題名（和文）1歳6か月児健康診査において子育て支援をする心理職の役割

研究課題名（英文）Role of Psychologists Providing Child Care Support at 1-year-6-month Infant Health Examinations

研究代表者
平沼　晶子（HIRANUMA, Akiko）

白百合女子大学・文学部・助教

研究者番号：６０７０９２０２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1歳6か月児健康診査に従事する心理職の役割を検討するために、健康診査の中心にある保健師と健康診査を受診した子どもをもつ養育者に質問紙調査を実施した。その結果、保健師からは心理職の専門性を親支援および子どもの発達支援に活かすこと、子どもの発達の見極めや支援の方向づけに関するコンサルテーションを保健師に行うことが心理職の役割として示された。一方、養育者からは子育て中の親への精神面での支援が強く求められるとともに、健康診査に従事する心理職の存在周知が不十分であるという問題が指摘された。
以上より、1歳6か月児健康診査という地域に根差した支援に必要とされる心理職の役割と課題が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：In the present study, public health nurses, who coordinate the health examinations, and the guardians, who bring the children to consult, were asked to complete a questionnaire to determine the role of psychologists at 1-year-6-month infant health examinations. As a result, public health nurses answered that the roles of psychologists were to use their specialization in supporting parenting and child development, and to advise nurses in determining the development of a child and to guide support. On the other hand, guardians, who strongly require mental support, pointed out the issue with insufficient awareness of the existence of psychologists at 1-year-6-month infant health examinations.
From the above, the roles of psychologists as well as the issue rooted in the regions of support were made clear.

研究分野：発達臨床心理学

キーワード：1歳6か月児健康診査　心理職　役割　子育て支援

１．研究開始当初の背景

(１)乳幼児健康診査の目的の推移

保健所における重要な事業のひとつに乳幼児健康診査（以下、乳幼児健診）の実施がある。乳幼児健診は乳幼児の健康の保持や増進に向けて、母子保健法に基づき各市町村での実施が義務づけられており、多くは3～4か月児、1歳6か月児、3歳児を対象にした集団健診の形をとっている。このように、乳幼児健診は国内でほぼ同じ内容を提供できる優れたサービスであり、受診率も9割超と高く、乳幼児の健康を守る重要な位置づけとなっている（宮嵜，2009）。

乳幼児健診の役割も時代とともに大きく変化している。かつては疾病の早期発見に主眼をおいたスクリーニングが主な目的とされた。しかし、核家族化や少子高齢化が進む今日では、「子育て支援」が大きな役割を担うようになり、子育て家庭を対象としてそのQOLを高めるための適切な支援を提供し、子育てに伴うストレスの軽減や子育てそのものへのサポートなど、健全な成育環境の整備が重要課題とされている（中村，2008）。同時に、「発達障害の早期発見と早期療育」や「子ども虐待の防止」も健診の重要な目的となっている。

今日、乳幼児健診には、保健師、医師、心理職、栄養士などの多職種が携わっており、特に、子どもの発達や親の心の問題への対応という点においては、心理職に大きな期待が寄せられている（中村，2012）。

(２)保健師が求める心理職の役割を明確にする必要性

先述のとおり、乳幼児健診では保健師が中心となり、多職種からなる専門的な視点を統合して、乳幼児の発達や養育者の子育てを確認していく。中でも、地域の子育て支援という点では、保健師と心理職が子どもの成長発達と養育者の心身のケアを分担し連携をとることに重要な意味がある。

しかし、現実には心理職の多くは非常勤職員であり、仕事を始めるにあたってのオリエンテーションや研修の機会はない（三宅，1985）。そのうえ、健診場面のみに単独で入る心理職は保健師のニーズを知る機会が少なく、心理職の専門性が十分発揮しきれていない面がある。また、その役割も明確ではなく個人の裁量に任されていることが多い。

したがって、乳幼児健診において保健師と心理職の連携を図るには、まず、保健師が求めている心理職の役割を明らかにする必要がある。それにより互いの役割を確認し、保健師と心理職の協働による子育て支援が有効に機能すると考えられる。

(３)養育者が求める心理職の役割を明確にする必要性

先に述べたように、乳幼児健診の受診率は9割を超える高さであるが、その満足度は低下傾向にある（中村，2008）。

乳幼児健診に関する親の意識調査結果（中村，2010）では、集団健診のメリットとして、専門多職種による同時関与や指導が可能なこと、仲間作りの場になることがあげられた。一方、デメリットとして、機械的で質問できる雰囲気でない、待ち時間が長いうえに流れ作業になっていて、自分の子どもを診てもらったという実感がわかないという不満があげられている。

乳幼児期の子育てにおいて養育者の抱く不安や疑問は多様であり、集団健診のデメリットとして示された内容からは、個別で細やかな対応が必要とされていることが窺われる。そこで、養育者が個々に抱える問題のうち、何を心理職に相談したいと考えているのか、つまり、乳幼児健診において養育者が心理職に求める役割を把握することは、子育て支援の充実を図るうえで重要となる。さらに、個別で細やかな対応という点において、乳幼児健診で実施している心理職による個別相談は養育者のニーズに見合うものとして有効である。

以上より、養育者の要望に沿った支援を行うためには、乳幼児健診において養育者が求める心理職の役割を明確にする必要があると考える。

２．研究の目的

本研究では、乳幼児健診の中でも1歳6か月児健康診査（以下、1歳6か月児健診）における心理職の役割について検討する。1歳6か月児健診に特化する理由は、言葉の発達や理解に個人差や子どもの特徴がみられ始める時期であり、子どもの育ちに関する心配をもちやすいこと、また、子どもの自我の発達に伴い子育ての負担感が増すため、相談へのニーズが高くなるからである。研究は以下の2つの課題からなる。

(１)1歳6か月児健診において保健師が求める心理職の役割

養育者の相談を受ける窓口として健診の中心にある保健師が、心理職に求めている役割を明らかにする。面接において、保健師と心理職の役割には重なる部分が多いが、心理職としてどのような専門性が求められているのかを明らかにして、保健師との連携を踏まえた適切な支援のあり方を検討する。

(２)1 歳 6 か月児健診において養育者が求める心理職の役割

1 歳 6 か月児健診において、養育者が必要としている心理職の役割を明らかにする。そのうえで、子育て中の親のニーズにいかに応えて、地域の子育て支援につなげていくかを検討する。

３．研究の方法

(１)1 歳 6 か月児健診において保健師が求める心理職の役割

①調査対象

A 市において 1 歳 6 か月児健診に従事する保健師 21 名

②調査期間

2013 年 3 月～4 月

③調査方法および内容

質問紙調査を実施し、1 歳 6 か月児健診に携わる心理職に関して、「どのようなケースを心理職に回しているか」「心理職の役割として大切なこと」「心理職が入ることのメリット」「心理職との連携で難しい点」「心理職への要望」の 5 項目について記述式の回答を求めた。得られた回答（全記述数 177）について、5 項目別に内容を分類した。

(２)1 歳 6 か月児健診において養育者が求める心理職の役割

①調査対象

A 市で 1 歳 6 か月児健診を受診した子どもをもつ母親 553 名（子どもの年齢は、1 歳：11 名、2 歳：124 名、3 歳：209 名、4 歳：187 名、5 歳：22 名）

②調査期間

2014 年 6 月～9 月

③調査方法

質問紙調査は A 市内の幼稚園 1 園と保育園 4 園に承諾を得て行った。実施に際して、研究主旨と研究倫理を書面に明記した。具体的手続きとして、各園の保育者が在園児の保護者に調査を依頼し、質問紙の配布および回収を行った。また、保育園内の支援センターを利用する保護者からの協力も得られ、その場合は郵送にて回収した。調査全体の有効回答率は 55%であった。

④調査内容

質問項目は「子どもが 1 歳 6 か月の頃に抱く困り感」「子育てにおける相談相手」「1 歳 6 か月児健診に従事する心理職に対する認識と要望」の 3 部からなり、多肢選択法と記述式で回答を求めた。

４．研究成果

(１)1 歳 6 か月児健診において保健師が求める心理職の役割

保健師による記述内容を分類した結果は、表１のとおりである。まず、本研究の目的である「心理職の役割として大切なこと」については、第１に「養育者の気もちの受けとめ、具体的な助言、不安の軽減」といった「親支援」があげられた。具体的には、心配感や困り感がつよいケースでは養育者の気もちに添った助言を提供し、不安を軽減させることが求められていた。そのうえで養育者との関係づくりに努め、継続的な支援につなげていくことが求められていた。一方、発達障害の早期発見の観点からは、「子どもの発達の見極め」も重要な位置づけにあり、見立てに基づいた適切な支援につなぐことが心理職の役割として示された。

その他、「心理職との連携で難しい点」に関しては、現状に満足しているという意見が多かったものの、待ち時間が長い、申し送りにかける時間がないなど、健診や連携の体制上の問題が示された。

また、「心理職への要望」として、保健師への助言や専門性の提供があげられており、保健師に対して子どもの発達の見極めや支援の方向づけに関するコンサルテーションを行うことが求められていた。

表１ 保健師による記述内容の分類結果

( )内は記述数

心理職に回すケース		子どもの発達が気になる (17)
		養育者が心配している、困り感がある (14)
		子どもの発達が気になるが、養育者が心配していない、問題とされたくない (5)
		見立てに迷う (5)
		養育態度が気になる (5)
	(48)	具体的な助言、指導が必要 (2)
心理職の役割		養育者の気もちの受けとめ、具体的な助言、不安の軽減 (16)
		健診後の支援への橋渡し、関係づくり (10)
		発達の見極め (9)
	(36)	保健師への助言 (1)
心理職が入るメリット		保健師では判断がつきにくい発達の見極め、心理職の専門性 (13)
		発達に関する適切で具体的な支援の提供、養育者支援 (7)
		保健師にとっての安心感･やりやすさ (6)
		健診後の支援への橋渡し (5)
		保健師への助言･保健師のスキルアップ (2)
	(34)	養育者への支援の見極め (1)
連携の難しさ		連携の難しさなし (8)
		面接内容が不十分 (5)
		養育者が拒否的でつなげない (4)
		待ち時間が長くてつなげない (4)
		申し送りが十分にできない (3)
	(25)	心理職の記録の不備 (1)
要望		保健師への助言･フィードバック･支え (13)
		要望なし、現状に満足 (11)
	(34)	面接内容、姿勢、体制の改善 (10)

(2)1 歳 6 か月児健診において養育者が求める心理職の役割

① 子どもが１歳６か月の頃に抱く困り感

対象者の約半数は子どもが１歳６か月の頃に何らかの困りごとを抱えており、特に第 1 子の子育てにおいては困り感をもちやすいことが明らかになった。また、困っていることの具体的な内容は、「子どもの成長、発育、発達について」「子育てに関する親としての問題」「子どもの生活上の悩みについて」など多岐にわたっており、個々のニーズに応じたきめ細やかなサポートの必要性が示された。

② 子育てにおける相談相手

母親の多くは、身内や友人、専門家、インターネットなどを通して子育てに関する情報を得たり、子育てについて相談ができる状況にあった。そして、インターネット社会の発展とともに、多くの母親が子育てに関する情報収集や相談にインターネットを利用する一方で、相手と直接対面しての相談も同程度に利用していることが明らかになった。特に、第１子の母親にこれら両方の利用が多く、先に示された第１子の母親の方が子育て困難感を抱きやすいことに対応していると考えられた。

そして、インターネットと直接対面による相談のメリットとデメリットとして、次の点が指摘された。まず、インターネットを利用するメリットとして、同じ悩みをもつ親同士の交流や子育てをしながら手軽に必要な情報が幅広く得られる点があげられた。一方、デメリットとして情報が多すぎて取捨選択が難しいこと、情報の信憑性への不安、情報を得ることで余計に心配が募ってしまう点があげられた。

次に、直接対面して相談をすることのメリットとして、個別に具体的な相談ができることや、実際に話を聞いてもらうことで安心感が得られる点があげられた。一方、デメリットとしては、面と向かって言われることで不快な思いをすること、納得できる答えが得られずに悩むなどがあげられた。

子育て中の親はこのようなメリットとデメリットを認識しながら、必要に応じて使い分けていることが窺われ、1歳6か月児健診での直接対面による相談もこれらの点を踏まえて養育者が利用しやすく満足できる対応をしていく必要があると考えられた。

③ 1 歳 6 か月児健診に従事する心理職に対する認識と要望

まず、1 歳 6 か月児健診に心理職が従事していること自体への認識の低さが示されると同時に、心理職が健診にいることを知らなかったために相談をしなかったという回答が多く寄せられた。したがって、心理職の存在を周知すべく、早急な対応の必要性が課題として示された。この点は心理職に対する要望として、対象者からも指摘されていた。

また、相談したいことがあっても、待ち時間が長くて子どもがぐずる等の意見もあげられており、相談体制に関する検討も必要と考えられる。

次に、心理職に期待する役割としては、子育てにおける母親自身の悩みや不安を聞き、相談にのるという母親への精神的サポートがもっとも求められていることが明らかになった(図 1)。心理の専門家として子どもの発達確認や子育てに関する具体的な助言という役割も担っているが、子育て中の母親からは、子育てに伴う悩みや不安を共有し、母親のストレス軽減をはかることが第一に必要とされている点があらためて示されたといえる。

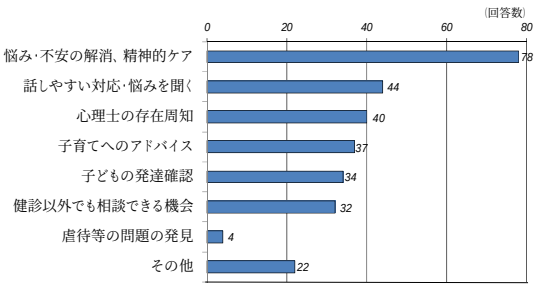

図１ 1歳６か月児健診において養育者が求める心理職の役割

(3)総 括

本研究では、1 歳 6 か月児健診に従事する心理職の役割を検討するために、健診の中心にある保健師と健診を受診した子どもをもつ養育者に質問紙調査を実施した。

その結果、保健師からは心理職の専門性を親支援および子どもの発達支援に活かすこと、子どもの発達の見極めや支援の方向づけに関するコンサルテーションを保健師に行うことが心理職の役割として示された。一方、養育者からは子育て中の親への精神面での支援が強く求められるとともに、健診に従事する心理職の存在周知が不十分であるという問題が指摘された。

以上より、1 歳 6 か月児健診に従事する心理職に求められる役割と課題が明らかにされた。したがって、本結果を健診に携わる心理職をはじめ、他職種にもフィードバックすることにより、1 歳 6 か月児健診における子育て支援の充実を図りたいと考える。

最後に、筆者が 2014 年に視察を行った米国ハワイ州ハワイ島の子育て支援プログラム Hawaii Healthy Start に言及し、今後の展望を述べる。このプログラムは 0 歳から 3 歳の

子どもをもつ家庭を対象とした支援で、1978年から始まり繰り返し検討されてきた。その後Healthy Families Americaとして全米に広がった子育て支援プログラムの基盤となるものである。基本理念は、子育てに関わる問題を包括的に捉えて、看護師、保健師、心理職、ワーカーが協働していくことにある。

スタッフの基本姿勢として優れた点は、養育者に対して「子どもを産み、育てる」という営みそのものを教育し、ともに考えるための時間を十分にとっていることである。そこでは、明るい挿絵の入ったハンドブックを使いながら、子どもの発達とその時期の親の対応、親自身の気もちをどのようにリラックスさせていくかなど、養育者は子育てに関してさまざまな角度から学んでいく。そして、支援者はあくまでも養育者を肯定して長所を認めながら関係性を構築し、共に歩むという姿勢に立っている。

日本においても「子育て」を知る機会のないまま親になる養育者が多く、そのことが子育て不安や負担感につながる側面がみられる。そのため、子育てに関する学びの機会を体系立てて提供することは有効であると同時に、こうした心理職による支援が養育者との距離を近づけ、気軽に相談できる身近な協力者として認識してもらえる可能性を含むと考えられる。したがって、今後は健診場面も含めた、心理職による継続支援のあり方について研究を進めていく。

＜引用文献＞

① 三宅篤子、乳幼児健診における心理相談員の活動、1985、尾関夢子、三宅篤子（編）乳幼児のための健康診断、青木書店、23-38
② 宮嵜雅則、乳幼児健診の歴史と法的根拠、小児保健シリーズ、64、2009、1-6
③ 中村　敬、乳幼児健康診査の現状と今後の課題、母子保健情報、58、2008、51-58
④ 中村　敬、乳幼児健診の現状と課題：現代の母親のニーズから、母子保健指導者研修会講演録（千葉県健康福祉部）、2010
⑤ 中村　敬、地域に密着した乳幼児健診、子育て支援と心理臨床、5、2012、10-17

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計４件）

① 平沼晶子、1歳6か月児健康診査において心理職がとらえる自らの役割と課題、日本発達心理学会第26回大会、2015年3月20日、東京大学（東京都 文京区）

② 平沼晶子・宮下孝広、Healthy Start Programにおける子育て家庭への支援、日本子ども学会学術集会第11回子ども学会議、2014年9月27日、白百合女子大学（東京都 調布市）

③ 平沼晶子、1歳6か月児健康診査において保健師が求める心理職の役割、日本発達心理学会第25回大会、2014年3月23日、京都大学（京都府 京都市）

④ 平沼晶子、1歳6か月児健康診査に携わる心理職の課題、第60回日本小児保健協会学術集会、2013年9月28日、国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都 渋谷区）

６．研究組織

(１)研究代表者

平沼　晶子（HIRANUMA, Akiko）
白百合女子大学・文学部・助教
研究者番号：60709202